

## 第四十一章 永遠の今

大平首相死す。

訃報は電波にのって、地球上を駆けめぐった。首相の快癒を信じていた人々はことごとく激しい衝撃に襲われた。

病院には、急を知った弔問の客が、明け方から、続々とつめかけた。鈴木総務会長、田中元首相、西村副総裁、桜内幹事長、福田前首相、三木元首相、在京の閣僚、自民党関係者、野党首脳、桜田武、永野重雄ら「経済界首脳等」。首相の亡骸に直面して出てきた人々は、一様に深い喪失感に陥り、記者たちの質問にも言葉少なに応じるにすぎなかった。

午前七時半、伊東官房長官は記者会見を行い、「午前二時半に容態急変を知らされて病院にかけつけたときは、首相の意識はすでになかった」と述べ、ついで、大平首相によって予め指名されていたところに従い、自ら首相臨時代理の職を行っていることを明らかにした。

八時四十分、医師団は、「午前二時二十五分、突然、上室性、心室性不整脈から心原性ショック状態に陥り、可能な限りのあらゆる手段を尽くして治療に当った甲斐もなく、五時五十四分、逝去された」と発表した。

大平首相の遺体は、病理解剖に付されたあと、しばらく地下一階の靈安室に安置された。病理解剖に当たった医師は、「冠状動脈は五十代か六十代前半の若さだった。想像を超える精神的ストレスがかかったのだから、太い動脈が痙攣を起こして収縮し、血流が止まった」と語った。淡々とした解剖所見を聞く者は、首相がいかに苛酷な負担に耐えてきたかを思つて、等しく声もなかった。

やがて、香川県に首相の選挙運動に行つていた次男裕、長女森田芳子もかけつけた。遺体を前にただ悲嘆にくれる遺族たちを慰めるように、「主ありて世を去りし信徒の靈魂安らかにいこわんことを」と祈りが捧げられた。

間もなく、遺体は柩に納められた。棺は白い十字架の縫取りのある黒い布で蔽われ、身近なものの手で、靈安車に乗せられた。十一時十九分、白バイ二台に先導された靈安車は病院をあとに、半旗を掲げる首相官邸と国会前を迂回し、職員の見送る中を、通いなれた高速道路を通つて瀬田の私邸に向かった。

付近の人々に出迎えられ、私邸に降りついた柩は、遺族らの手で邸内に運び入れられる。もはや声をかけてもらえなくなった「おじいちゃん」を目を赤くしてじっと見つめる孫たちの姿が、見守る人々の涙をさそつた。

私邸に官邸に、夜遅くまで弔問の客が相次いだ。午後三時には、天皇・皇后両陛下のお使いが志げ子夫人以下遺族に弔意を伝えた。

その夜は、身内だけの仮通夜である。祭壇は首相が平生使つていた、庭に面するリビングルームにしつらえられ、遺体は白い花で埋められた。

翌十三日夜は通夜式。

十四日は午後一時から密葬の形で葬送式が営まれた。聖歌がいくたびか流れる中を、約四千人が靈前に白い花を捧げた。

故大平首相の正式の葬儀は、伊東首相臨時代理を葬儀委員長として準備が進められたが、首相の控え目の人柄を汲んで、「国葬」とせず、「内閣・自由民主党合同葬儀」とすることが決まった。

合同葬儀当日の七月九日は、首相の死を悲しむように、朝から雨が降りしきった。喪主大平裕の胸に抱かれた遺骨が志げ子夫人に付き添われて、六千人の参列者の待つ合同葬儀場の日本武道館に到着した。奏楽の中に、十九発の甲砲が冷夏の梅雨空に殷々とこたました。

遺骨は、白と赤のカーネーションでつくられた日の丸を中心として白菊と杉の葉で飾られた式壇に安置された。一分間の黙禱ののち、大平首相の生前の声が流され、追悼の辞に移る。

伊東正義葬儀委員長がまず豊前に進んだ。

「……………大平総理。

あなたは、平生信義を守ること厚く、友誼を重んじ、遠謀深慮、ひとたび決意するや、その所信を買かねばやまぬ人でありました。その生涯は、文字通り、邦家のため、国民のために捧げつくされました。そして七十年の生涯を、政戦のさ中、不慮の病死によって閉じられたのであります。

本日はここに永別の時を迎え、ありし日の温容を偲び、万感胸に迫って、言語に絶するものがあります。時間が凍りついたように動かなくなりました。

満堂の参列者が身じろぎ一つしない中を、伊東葬儀委員長の重い声が、故大平首相の生い立ちを振り返りその業績を辿って行く。あの時この時の思い出が、参列者の脳裡を走馬燈のようにかすめる。式壇の上に掲げられた故大平首相の大きな遺影が、式場の人々に穏やかな微笑を投げかけている。

「……………あなたはまた、ゆたかな識見をもって、つねにすぐれた経綸を提示されました。地方の時代、文化の時代の到来を洞察した田園都市国家構想も、あなたの……………理想の結実であります。」

伊東首相臨時代理は、首相逝去の翌日、政策研究グループに、「大平首相の国民への最後の贈りもの」として、大平内閣の職務執行内閣がその役割を終えるまでに、未完成の報告書を完成してもらおうと依頼した。それから一カ月、研究グループの起草委員は、深夜、払曉に及ぶ作業をつづけ、首相の発案になる田園都市国家構想をはじめ九つのアイデアの設計図を仕上げた。書きあげられた報告書は、樹齢三百年の木曾檜の白木の箱に納められ、首相の霊前に捧げられた。

これによって、大平首相の遺産は、後代に受け継がれることとなった。

「……大平総理。

あなたはさらに、国際情勢の緊迫する中で首脳外交を展開され、わが国の国際的地位の向上に大きく貢献されました。諸外国との友好親善関係を深め、世界の平和と秩序の維持発展のためにあらゆる努力を傾けられました」。

首相逝去の日の外電は、世界各国の政府首脳が深い哀悼の意を表している旨を打電してきていた。とりわけ生前、大平首相がしばしば訪れた米国と中国の喪失感は大きかった。

そのカーター米大統領、華国鋒中国首相をはじめとして、フレイザー豪首相、シュライヤー・カナダ総督、ブレム・タイ首相、ラーマン・バンクグラデシユ大統領、朴忠勲韓国首相、マルコス・フィリピン大統領夫人、ボポリコ・ロコンガ・ザイル首相、リスロ・ザンビア首相、タマセセ四世サモア副元首ら、本国から派遣された四十八カ国を含む百八カ国、二つの国際機関の代表が式場に参列していた。

黒い喪服の着席者の中に点々とまじるアジア・アフリカ系の国々の代表のまとう民族衣装の華やかさが、式場にかすかな彩りを添えていた。合同葬儀後、カーター大統領、華首相、マルコス大統領夫人は、瀬田の大平邸を訪問し、改めて弔意を伝えた。

大平首相は、世界の平和と繁栄を図ることを政治の最大の使命と考え、国際間の理解と信頼を深めるために、渾身の力をふるった。だが、振り返ってみれば、この年四月末からの米国、メキシコ、カナダ、ユーゴ、西独をめぐる十二日間、五万キロという最後の外遊は、死出の旅路の一步でもあった。

「……少しは休養をとるようにと勧める私どもに対して、あなたは、『政治家は倒れて後やむ』と肯んじられませんでした。……」

国運をにない、重大な使命を果たして長途の旅から帰られたあなたを待っていたかのように内閣不信任決議案が上程され、しかも予期せぬ事態によってこれが可決されました。……

人を愛すること深く、争いを好まず、静かな思索を求め、『明日枯れる花にも水をやる心を大事にしたい』と言われた心やさしいあなたに、時代はさらに苛酷な克己と緊張を強いたのであります。』

伊東葬儀委員長の声がわずかにふるえた。戸外では雨脚がさらに激しくなった。

「……ひとたび、『総理病に倒る』の報が伝わるや、快癒を願う国民の声は巷にあふれ、海外からも心からなる見舞いが多く寄せられました。医師・看護団の献身的な加療によって、病状は日を追って快方にむかうかに見えました。われわれはようやく愁眉をひらき、あなたもまた、病軀を押して、ベネチア・サミットに出席する決意を固められ、これに伴う諸般の準備を指示されました」。

あれほど出席に意欲を示したベネチア・サミットに、大平首相はついに参加することができなかったが、その遺影は議場のテーブルに飾られて、会議の進行を見守った。日本からは、各国首脳了解のもとに、大来外相が代役として、竹下蔵相、佐々木通産相とともに参加し、大平首相の遺志を体して、西側同盟への連帯を誓約した。

「大平総理。

あなたは、病床にあつても、終始政局の安定を念じつつげられました。選挙は無事に終わり、見事な成果を収め得ました。しかし、その結果をご報告しようにも、あの温顔はもはやありません。断腸の思いとはまさにこのことであります」。

大平首相の劇的な死は、多くの自民党員を奮い立たせ、それまでの党内抗争のわだかまりを吹き飛ばして、選挙戦を戦わせた。候補者は、事務所に黒いリボンを結んだ大平首相の遺影を掛け、腕に喪章を巻いて選挙演説を行った。

憲政史上初の衆参両院同日選挙は、ベネチア・サミットと同日の六月二十二日に投票が行われたが、有権者の関心もにわかにも高まつて、その投票率は、参議院選挙で戦後最高、衆議院選挙で戦後四番目の高率となった。開票の結果、自民党は衆議院においては二百八十四議席（前回二百四十八議席）を獲得して前回を上回ること三十六議席、選挙後の追加公認を入れて二百八十七議席となり、また参議院においては、六十九議席（ほか推薦一）を取り、非改選と合わせて百三十五議席となった。ここに、六年間つづいた与野党伯仲状態は完全に解消し、大平首相が病の夢寐にも見た政局の安定は確保された。選挙の結果が明らかになった六月二十四日、伊東首相臨時代理、西村副総裁、桜内幹事長らは、瀬田の大平邸を訪れ、豊前に同日選挙の勝利を報告した。

「大平総理。

神は、時代が最も危険な曲り角に処する時あなたを選んでわが国の指導者とし、その運命を託されました。あなたは、深い思索と倦むことを知らない努力によって、立派にその使命を果たされたのであります。

われわれは、不敏ながらあなたの志を継いで、政治の信義を興復し、新しい時代を打開していくことをお

誓いました。

……倦むことを知らず、苦難に耐えて、理想に邁進してこられた大平総理。いまはただご冥福とご冥助をお祈りして、永別のご挨拶といたします」。

数千人の市民が雨にぬれながら、日本武道館の周囲を取り巻いていた。買物籠をかかえた主婦、杖をついた老人、学校帰りの生徒や学生、中には、遠く地方から出てきた人も少なくなかった。

甲辞が済み、会場内の参列者の献花が終わると、これらの市民たちの一般献花に移る。深々と頭を下げる人、遺影を見上げて何ごとかつぶやく人。ようやく止みかけた雨の中を、音楽隊の奏楽を背景に、献花の列は約二時間にわたってつづいた。

こうして大平正芳は、明治四十三年から昭和五十五年に至る七十年三カ月の生涯を閉じた。

大平が政治家として与えられた使命を果たしたかどうか、その評価は後世の史家に委ねたい。だが、その一生を振り返るとき、大平正芳は、「政治家である前に人間らしい人間として生きたい」と念じた彼自身の願いを十分に果たしたと言えるであろう。

大平正芳の墓地は、東京西郊の多磨と郷里豊浜町にある。その墓石の裏面には、親友伊東正義の撰書になる次の文字が記されている。

君は永遠の今に生き

現職総理として死す

理想を求めて倦まず

斃れて後已まざりき